

# 維新史回廊だより



第22号  
2014年  
9月発行  
年2回発行

■編集 総合企画部スポーツ・文化局文化振興課  
■発行 山口県総合企画部スポーツ・文化局文化振興課  
(山口市滝町一一一TE) 〇八三一九三三一六一七〇

維新史回廊だより第二回をお届けします。今から約一百五〇年前、元治元年（一八六四）における高杉晋作の功山寺決起について、下関市立東行記念館の一瀬幹学芸員に解説をお願いしました。

## 高杉晋作の功山寺決起

元治元年（一八六四）十一月十五日深夜、高杉晋作は雪の降り積もる長府功山寺において挙兵しました。世に言う功山寺決起です。この時、晋作は何を考えていたのか、決起は長州藩の何を変えたのか、長州内外の政治状況も踏まえながら少し考えてみたいと思います。



高杉晋作写真  
(下関市立東行記念館蔵)

門の変）。久坂玄瑞は自決し、入江九一・来嶋又兵衛は討ち死にしました。御所に向かって発砲した長州藩は朝敵とされ、同月二十四日、幕府は長州藩征討の勅命を受け、西南二十一藩に出兵を命じました。さらに八月五、六日には英仏蘭米の四国連合艦隊が下関を砲撃し、長州軍は惨敗しました（下関戦争）。

このような危機的状況において、長州藩は七月一十七日、萩本藩と各支藩・分家（長府藩・徳山藩・清末藩・岩国吉川家、本稿では本支藩・本分家すべてを合わせた総称として長州藩と呼んでいます）の当主が参加する会議を行い、朝廷・幕府への対応方針を協議しました。そして、岩国吉川家当主経幹の建議もあり、先発部隊を率いた三家老（益田右衛門介・福原越後・国司信濃）らに全ての罪を着せることで藩の生き残りを図る方針を決定します。三家老の死罪は、萩藩政府が晋作たちに近しい急進派（いわゆる「正義党」）で構成されている段階での決定でした。八月六日には、広島に置かれた征長総督府への周旋を吉川経幹に依頼し、征長軍の進攻を防ぐための交渉が始まります。

この時、長州藩内、特に萩藩内には主に征長軍への対応を巡る鋭い対立が生じていました。すなわち、幕府が進攻してくれば武力抵抗も辞さない「武備恭順」を掲げる急進派（「正義党」）と、幕府にひたすら謝罪し許しを請う「純一恭順」を是とする保守派（「俗論党」）との対立です。両派はこれまで政争を繰り広げてきましたが、度重なる失態で急進派が勢いを失うと、十月には吉川経幹の後ろ盾を得た椋梨藤太ら保守派が

萩藩の実権を奪います。保守派政府は、十月二十一日に諸隊解散令を通り、十一月十一、十一日に三家老を切腹、四人の参謀を斬首に処します。さらに同月十六日、吉川経幹は広島国泰寺において征長総督前々尾張藩主徳川慶勝と会見し、三家老首級を差し出し恭順を誓います。長州藩が恭順姿勢を示したこと、ひとまず征長軍の進発は猶予されることになりました。

#### Q 晋作はどのように行動したのでしょうか？

保守派が萩藩の政権を奪取し、身の危険を感じた晋作は、元治元年十一月初めに筑前へと脱走し、勤王歌人として多くの志士たちと交流のあった野村望東尼の平尾山荘に匿われることになります。晋作は筑前にいる間、九州諸藩の連合を謀ったようですが、効果はあがらませんでした。そんな晋作の元に三家老・四参謀処分の報が届きます。晋作は「胸中焼けるが如く」と大いに心を痛め、状況を開すべく同月二十五日、下関に戻ります。晋作はまず、諸隊が一致団結して保守派政府と戦うことについて語りましたが、諸隊の幹部たちは中々首を縊に振りません。業を煮やした晋作は、十二月二二日夜、酒の席において諸隊幹部たちを激しく罵倒しながら、挙兵への同調を要請します。御楯隊の品川弥二郎や諸隊客分の野村靖ら同志は、過激な行動に反対し自制を促しました。しかし、聞く耳を持たない晋作は次のような演説に打って出ます。“君らは赤祢武人に騙されている、武人は大島郡の一土民に過ぎず、国家の大事、藩主父子の危急を分かってはいない。自分は毛利家三百年来の家臣であり、武人の如き一土民の比ではない。決してこの拳を止めることはできない”と。鬼気迫る様子で訴えましたが、現奇兵隊総督の赤祢武人を一土民呼ばわりし、自らが毛利家譜代の臣であることを誇示する晋作の主張は、軽輩出身者の多い諸隊の賛同を得られるはずもなかったのでした。

そもそも諸隊が晋作の挙兵に同調しなかつたのは、赤祢や長府・清末

藩などが進めていた諸隊・萩藩政府間の調停策が順調に運び、諸隊存続と政府員交代の日途が立っていたからでした。ただ、全く賛同がなかつたわけではなく、遊撃隊総督石川小五郎・同軍監高橋熊太郎・力士隊の伊藤俊輔らは、晋作と共に挙兵することを約しました。

そして、十一月十五日深夜、雪で真っ白になつた長府功山寺において、晋作は意気軒昂として三条実美ら五卿を訪ね、「是から長州男兒の手並を御覽に入れ

ます」と決意

を表明しま

した。晋作は五十名とも八十名ともいわれる僅かな軍勢を

率いて、下関新地の会所（萩藩の出張所）へ向けて進軍しました。晋作たちは新地会所を急襲し、わずかながら資金と食糧を得ます。さらに晋作は十数人を率いて三田尻へと向かい、萩藩海軍の癸亥丸艦長佐藤与藏らを説き伏せ、庚申丸・丙辰丸と合わせて、萩藩所有の洋式軍艦三隻の全てが晋作らクーティー軍側につき、戦力は飛躍的に高まりました。

この時、諸隊はまだ鎮静を保つており、十六日、山間部の伊佐へと撤退を開始しました。しかし、ここで諸隊の考え方を大きく変える事件が起ります。十九日に萩藩政府が幽囚の身であった前田孫右衛門・毛利登人ら七人の旧政府員を処刑したのです。前田らは諸隊が復活させようとしていた同志であり、この報に接した諸隊はついに武力対決を決意したのでした。萩藩政府は晋作の挙兵に前田らが呼応することを恐れたので



三条実美公履歴（東行庵蔵、  
下関市立東行記念館寄託）

す。また、征長総督府の長

谷川惣蔵から五卿の九州移

転と諸隊の鎮撫を督促され

ていたことも大きく影響し

ました。晋作の決起により

政情はさらに不安定になり

ましたが、萩藩政府は二十

日に萩入りした総督府巡見

使に対して恭順の姿勢を改

めて示し、二十七日には征



高杉晋作像（功山寺）

長軍解兵が通達されました。萩藩政府は続いて、諸隊を鎮圧するために出兵し、元治二年（一八六五）元日、諸隊側の要求をすべて却下し、山間部への退去と武装解除を命じる通牒を達しました。

一方、晋作らは高札を掲げるとともに「討奸檄」という印刷物を人々に配布し、挙兵の趣旨を宣言しています。晋作は政府の「奸吏」が藩主の趣意に背き、「四境の敵に媚」び、「正義の士を幽殺」し、「敵兵を御城下に誘引」しているなどと激しく非難します。事実認識としては間違っている部分もあるのですが、諸隊の行動が正当であることを民衆に示すとともに、兵士を鼓舞することが主な目的であったといえるでしょう。そして、正月六日夜半、諸隊は山口近郊の絵堂において萩藩政府軍に奇襲攻撃を仕掛け、ついに武力衝突へと展開します。

この時、諸隊と萩藩政府との調停策が破綻し立場を失った赤祢武人は、正月一日、下関から筑前へ逃亡していました。その後も赤祢は抗争激化を防ぐための画策を続けますが、諸隊から裏切り者の烙印を押され、故郷の柱島に戻っていた慶應元年（一八六五、四月に元治から改元）十二月二十七日に捕えられ、翌二年（一八六六）正月二十五日、山口鰐石河原で斬首されました。辞世の句と伝わる「眞は誠に偽りに似、偽りは以

て眞に似たり」といふ言葉に赤祢の無念が滲み出ているようです。

#### Q 元治内乱の結果、長州藩はどうなったのでしょうか？

諸隊と萩藩政府軍の戦闘は萩と山口を結ぶ道路沿いの山間部を中心に行われ、正月十六日まで数次にわたりました。兵力については、諸隊が七、八百人、萩藩政府軍が一千五、六百人から一千人ぐらいだったようです。人数だけを見れば諸隊は劣勢でしたが、士気の面においては政府軍を圧倒し、諸隊は各地で勝利を重ねます。晋作は戦闘開始の報を下関で聞き、正月十四日に伊佐へ出撃し諸隊と合流したので、参戦は遅れましたが、十六日夜半の戦闘では遊撃隊を率いる政府軍を破っています。

同日、萩藩内部では鎮静会と称する一部家臣団が上書を提出し、即時の停戦を求めました。彼らは長州の政情が悪化し国力の疲弊することを憂え、内乱の早期終結を最大の目的とした。鎮静会は以前より諸隊・萩藩政府間の周旋活動を担っていた支藩の長府・清末藩と結び、保守派政権に政府員交代を要求、保守派の中心である棕梨藤太・中川宇右衛門らの免職が実行されます。最終的には鎮静会と長府・清末藩兵が萩城を封鎖し、さらに諸隊の軍事的圧力も加えて、二月十四日に大幅な政府員交代が実現し、保守派官僚は一掃されることになりました。棕梨ら十二名は萩を脱走しますが、捕えられた萩に送還されます。保守派を支援していた岩国の吉川経幹は寛典処分を求めましたが、諸隊や四月二十六日に但馬から長州に戻った桂小五郎は厳罰を主張しました。閏五月十五日から二十一日にかけて、本支藩主会議が開かれ、経幹も同意の上、保守派の処分と第二次長州出兵（四月十三日に幕府は再び諸藩に出兵を命じていました）に対する実力抗戦方針を決定しました。閏五月二十八日、棕梨は斬首され、他の保守派中心人物も厳罰に処されました。ここにおいて元治元年後半から続く藩内抗争は終結し、長州藩の「抗幕」体制が確立されます。

では改めて功山寺決起の歴史的意義について考えてみましょう。まず、晋作はなぜ挙兵したのでしょうか。最も直接的な理由は三家老・四参謀の処分であると考えられます。この処分は急進派が萩藩の政権を握っている段階で決定していましたが、実際に手を下したのは保守派政府となりました。晋作が三家老らの処分決定のいきさつを知っていたか定かではありません。晋作にしてみれば保守派は同志の敵と映ったのでしょうか。晋作当時の、晋作と諸隊幹部との違いは、保守派への不信感・嫌悪感の程度だったのかもしれません。晋作は保守派と妥協するなどありえず、武力衝突になろうとも敵を一掃し、完全に排除することが必要だと考えたのでしょう。一方、赤穂武人は保守派政府とも交渉し折り合いを付けることが可能だと考えました。晋作の決起によって二人の対立は決定的となり、結果的に勝利を掴んだのは晋作でした。

歴史にもしもの話はいろいろかもしませんが、もし晋作の決起に諸隊が最後まで同調していなければ、晋作が諸隊から追放されていたかもしれません。もし晋作が決起を思い止まっていれば、赤穂とともに長州藩を主導していたかもしれません。歴史の展開というのは紙一重の差で決まるものだと改めて思われます。

それから、晋作の決起についてよく言わるのが、これによつて明治維新が早まつたとか、長州藩論が討幕に統一された、とかいう評価です。これは妥当な評価とは言えません。そもそも晋作は幕藩体制そのものを否定してはおらず、むしろ長州藩毛利家の臣であることを誇っています。晋作が目指したのは、幕府への徹底抗戦路線であり、長州藩の中央政界への復帰でした。したがつて、晋作の決起を討幕や明治維新に直線的に結び付けることはできません。

晋作の行動は萩藩の保守派を一掃することに繋がり、長州藩「抗幕」体制の確立へと帰結します。その後、薩長盟約が締結され、幕長戦争（四

境戦争）に勝利すると幕府の権威は失墜し、長州藩と薩摩藩は武力討幕に傾斜していきます。このように考えると、晋作の決起は長州藩が討幕路線へと舵を切る一つの重要な契機であったといえるでしょう。非常に複雑な当時の長州内外の政治状況と、内乱によって多くの犠牲を払ったことを考えると、良いとか悪いとか、明治維新を早めたか否かとかいうような二者択一的な評価を下すことはできませんが、高杉晋作の功山寺決起が幕末長州藩の運命を分ける最も重要な分岐点であったことは間違いないでしょう。

#### 〈参考文献〉

- 『高杉晋作と奇兵隊』（東行庵、一九八九年）
- 青山忠正『明治維新と国家形成』（吉川弘文館、二〇〇〇年）
- 同『高杉晋作と奇兵隊』（吉川弘文館、二〇〇七年）
- 一坂太郎編『史料 赤穂武人』（東行庵、一九九九年）
- 同編・田村哲夫校訂『高杉晋作史料』一～三（マツノ書店、二〇〇一年）
- 同『高杉晋作』（文藝春秋、二〇〇一年）
- 海原徹『高杉晋作』（ミネルヴァ書房、二〇〇七年）
- 梅溪昇『高杉晋作』（吉川弘文館、二〇〇一年）
- 高橋秀直『幕末維新の政治と天皇』（吉川弘文館、二〇〇七年）
- 二宅紹宣『幕長戦争』（吉川弘文館、二〇一二年）

維新史回廊だよりは、県内各市町の文化振興担当課や博物館・資料館、県政資料館に置いています。既刊号は、維新史回廊ホームページ（「維新史回廊だより」で検索）で御覧いただけます。

次号は、来年3月発行の予定です。1月から大河ドラマ『花燃ゆ』が放送されることにちなみ、楫取素彦に関する内容をお届けします。どうぞ御期待ください。